

黄塵万丈を彷徨して

——日中戦争期の北京における日本人結社「燕京文学社」について

鄒 双双

はじめに

日中戦争期、北京は八年間の長きにわたって日本の支配下に置かれていた。この史実は、栄光溢れる北京の歴史に屈辱の八年間が刻まれることを意味し、北京人ひいては中国人にとって顧みるに堪えがたい苦痛な出来事でもあった。精神的な打撃ばかりか、多くの人は北京を後に、砲火に追われながら転々とした生活を強いられるようになったからである。同時に、新たな出発として北京にやってきた各分野の日本人が一気に増えた。一九三七年にはおよそ四千六百人の¹⁾日本人居留民が、戦中の間は五万人にも増加した。²⁾当然ながら、おのおの異なる目的で北京にいたこれらの日本人居留民は、どのような思いで過ごしていたのかを知り尽くすのはもう不可能である。後人の私たちは

様々な資料を読み込んで推測するまでである。文学資料の一つとして挙げられるのは、「燕京文学」である。

「燕京文学」は北京在住の日本人による文学結社「燕京文学社」の同人誌として作られたのである。当時の北京における唯一無二の日本語文学雑誌として、日本文学研究、とりわけいわゆる「外地文学」研究にとつては貴重な資料を言わなければならぬ。現在神奈川近代文学館には第五号以外に創刊号から終刊号までの現物または複製品が所蔵されている。また、中国図家図書館には、第一、二、三、四、六、七、一七、一八号の現物が入っている。

これまで「北京の光芒・中藪英助の世界」で「燕京文学」と竹内好や武田泰淳ら主宰の「中国文学」との関連性を考察した立石伯氏の「燕京文学」と「中国文学」——淪陷区・北京から

の光芒」という論考があった。ただし、立石伯が五、一四、一五、一六号に目を通っておらず、燕京文学社の全容への解明を重心にしなかった。そのほか正面から燕京文学社を取り上げるものは見当たらない。研究がなされていない理由については、立石伯氏は「一面では中国の現地での文学活動と努力が、敗戦後日本でも異なつた形で維持・展開されない点があつたこと、また他面ではなによりも「燕京文学」あるいは戦中の華北や北京における日本文学社についての研究があまりなされていないことなどがその遠因として挙げられる」と分析した。そこで数年来日中戦争期の北京に注目しつつあつた筆者は、本稿において燕京文学社の実態を浮き彫りにしたい。

一、「萌へ出づる」——「燕京文学」の創刊

「黄塵万丈。こゝ、燕京にも春の萌しが見えてきた。」

これは「燕京文学」創刊号の編集者である引田春海が「編輯後記」で発した最初の一声である。その続きに、「結成を盟してより数個月、燕京文學もこゝにいよいよ萌芽することになった」とある。黄塵が依然と猛威を振る中、春の萌しと共に「燕京文学」は生まれたわけである。時は一九三九年四月である。

冒頭で述べたように、「燕京文学」は北京在住の日本人結社「燕京文学社」の同人誌であり、「燕京文学会」が結成して数か月後に創刊されたのである。創刊号の奥付によると、「昭和十四年三月二十五日納本 昭和十四年四月一日発行」、「編輯兼発行人」が引田春海で、北京新聞社印刷部から印刷され、「北京米市大街青年会三樓四號 燕京文学社」から発行される。「領価一冊三十錢」、会員希望者は「一年三圓六十錢、半年一圓八十錢」を納める必要があるようである。ちなみに、上記住所は大方「燕京文学社」同人が集う場所であろう。「米市大街」は一九四七年市内道路の名称整理、変更によって現在の東四南大街に合併されて、それと呼ばれる通りがもう地図から見出すことができないうが、バス停留所の名前として残り、名残が感じられる。

「燕京文学」の創刊に触れる上では、中心的な役割を果たした江崎磐太郎という人物に言及しなければならない。江崎磐太郎は本名志垣忠。一九一五年東京生まれ、北海道育ち。彼は一九三三年錦城中学校を卒業した後、東京発声映画脚本部に入る。一九三八年報知新聞社連絡員として中国に渡り、徐州開戦時、天津、濟南にいる。八月、北京新聞社に入社、そのころから「燕京文学」創刊を考え始めたという。つい翌年四月に「燕京文学」の創刊に漕ぎ着けた。その後、「東亜新報」創立とともに文化学

芸記者として入社、編輯局文化芸部勤務。一九四二年十月、北京文化協會設立、文学部委員に推される。一九四三年に二八歳の若さで亡くなる。⁷²

江崎磐太郎が「燕京文学」を作ろうとする目的については、創刊にあたって寄せた「創刊の辯」からすこし垣間見ることが出来る。

止みがたい衝動——幼い私等の出發はその一語に盡きる。戦争によって惹起された大きな轉換を前に尚從横として往かんとする私等は激烈な能動精神をもつて、此處「燕京」に集合した。先づ虚妄の扉を打ち破つて一躍、裸の人生に還元し、マンモスの悲劇に埋没せんとして居た中國黄土の巨體に我々民族の高い激しい理想を滲透させなければならぬ。

皮膚に、肉に、骨に、私等は文化の裂列弾となつて滲み込まなければならぬのだ。燃へる生命の炬火を振りかざして滲透する私等であつてこそ秩序ある東亜の新興文化人であり、居留他（ママ、地の誤植——筆者）の虚妄を混じへない開拓者であり得る事を遠く故國にも誇り得るのである。⁷³

「止みがたい衝動」に駆られて創刊を發案したのであるが、この「衝動」には、東亜秩序を変えていく戦争においての日本人としての役割やら、マンモスという巨象のように消滅していく中國に日本民族の文化を浸透させていくという一人の北京居留民としての「理想」やら、さらに居留地の虚妄を打ち破るといふ一人の開拓者としての責任、といったような様々な思いが含まれている。少なくとも、表向きの文字からこのようなメッセージが読み取られるであろう。一つの同人誌を以てどれだけ中國に日本文化を移植させることができるかは、高が知れている。しかしながら、あの時代にはこのような志が求められており、彼らもこの要請に応じようとする気持ちがあつたはずである。ただ、このような「崇高な理想」より更に切実な理由は、精神的「虚妄を打ち破る」ことにあると思われる。江崎磐太郎は同誌「同人雜感」のコラムでこう述べた。「理想に向かつて行動を持たぬと云う事——こいつは人間の恥だ。けれど若い者の虚空に浮いた夢はいけない——と思ひついた。燕京文学の生誕は、ともすると虚空に浮きそうな夢が、塊まり燃へ上がりながら出來た一つの行動なのだ。」⁷⁴ここで言う「理想」は、文学愛好者が集つて文学活動することを意味すると思われる。何といつても、北京にはこれまで日本語文学雑誌がまったくなかった

からである。

二、「棘薇の道」——「燕京文学」の運営状況

結論から言えば、「燕京文学」の運営は難航に難航を重ねた。編集者の引田春海が創刊号の「編輯後記」で「我々の今後進らなければならぬ道は、経済的にもその他種々な事情から推して見ても儘かに棘薇の道であるには違ひない」と予測したが、実際は彼の予測通りになった。

第二号の発行準備に際し、引田春海が「北京で雑誌をやることが、いよいよ困難なことに気が付く、印刷機の不備、活字の少ないこと、植字工が日本語の分からない支那人であることから来る時間的な差、又それに伴ふ校正の難しさ、それにかてて加へて印刷所は、どこもかしこも大繁盛である、こんな状態の下では、毎月の印刷が思ふやうにならず、印刷は遅れるのが當然だ¹⁰」とその難しさを打ち明けた。第三号となると、印刷所を最初の「北京新聞社印刷部」から「燕塵社」への変更を強いられた。当初の毎月一号を出すという計画は、三号まで無事全うことができたが、第四号から第六号までは隔月の発行となり、そして紙代、印刷費の高騰により、第六号（一九四〇年一月一

五日）より十銭の定価引き上げを余儀なくされた。¹¹ つい予告なしで一九四〇年五月第七号をもって一時停刊となった。

一九四一年五月、復刊と共に印刷所を新民印書館に変更した。これ以降、不定期ながら発行が継続し、一九四四年九月三〇日発行の第一八号で終刊となった。

このように、「燕京文学」は創刊当初から予想された運営の難航が現実化に化しつつある。戦時中という非常期における物質不足などによる出版の窮境からは、「燕京文学」も他雑誌と同じように免れることができなかった。そのため、発行が遅れたり、誤植が多く生じたり、印刷所をしばしば変更したり、一時停刊までに追い込まれたりするような状況にあった。

三、燕京文学社の同人について

同人メンバーに関して、江崎磐太郎が「創刊の辯」で「私等の仲間には、弾劾を受けて尚魂をさらけ出して一線に通譯の活動をして来た男がある。亦新聞社の編輯室に最後まで、厳正なる文化人たらんと目に等しい報道網を守つた男もある。他留学生、満鐵マン……」と記したように、実に多様である。またその一文を読んで見当が付くように、燕京文学社は創作経験を積

んだ既成文学者の集いではなく、むしろ初心者のそれと言えるかもしれない。

『燕京文学』の同人・作品募集にあたって、次のような条件が付けられた。

同人…年齢、職業、性別の如何に拘らず、すべて北支在住の日本人にして文學愛好者たる條件とす、参加希望者は作品を提出せられたし。

作品…詩、評論、小説、戯曲、シナリオ、隨筆、等如何なる形式に於ても自由、枚数制限せず、但しなるべく現地大陸に題を採れるものを望む。¹²

年齢、職業、性別を問わないが、日本人であることを必須條件とした。のちのち、「中国の作家を燕京文學の同人にしてはどうかと云ふ意見まで出來た」が、「これは文學創造の本來の立場から不可能なこと」とし、¹³中国人の入会を断つた。あくまで日本人でなければならぬことに拘つた。

また、第四号（一九三九年八月二五日発行）以降、時折名前と住所が書いてある同人録が掲載されるようになった。それによつて同人数を確認することができる（三号までは不明）。第

四号の同人録には一人の名前が並んでいることに加え、創刊号の執筆者が一二人であつたところから見れば、創刊当時も大方十人前後であろう。一九四〇年五月に一八人まで増加したが、一時停刊となつた。復刊の際は二八人の同人を有し、一九四三年六月まではおよそ三〇人の数が維持されていたが、一九四四年四月以降、二二人までに減少した。同人らの住所を見れば、北京在住の者に限らず、一人か二人の程度でありながら、天津、太原、張家口、開封といった所からの同人もいた。やはり北京在住の者が大多数を占めていた。

ここで創刊号の執筆者、第六号、復刊後の第一号である第八号と最終号の同人録に載つた名前を掲げる。

創刊号（一九三九年四月一日）執筆者…野中修、月山雪夫、江崎磐太郎、勝野萍太郎、谷蘇雨人、池田頭、北川正明、飯塚朗、遼平、深瀬龍、木谷住雄、朝倉康（計二二人）

第六号（一九四〇年一月二五日）同人録…江崎磐太郎、加藤正之助、飯塚朗、白鳥治夫、木田春夫、宮古田龍、木谷住雄、北川正明、深瀬龍、勝野萍太郎、今澤亮、朝倉康、諸橋龍泉（計一三人）

第八号（一九四一年五月一日）同人録…谷本知平、井口創、川邊武彦、飯塚朗、長谷川広、小池常作、折生宣雄、大島徳彌、上田官治、小野澤亘、木田春夫、小島亮、小池亮夫、酒井俊作、宮古田龍、野中修、大島忠雄、江崎磐太郎、瓜生敏一、久米広一、緒方禾、山名亜夫（計二二人）

最終号（一九四四年八月五日）同人録…井口創、飯塚朗、岡武志、岡崎俊夫、小浜千代子、川邊武彦、木田春夫、小島亮、清水信、杉本栄治、田坂奎三、辻光行、中井信夫、中藪英助、野中修、長谷川広、平野岩、宮古田龍、柳澤三郎、大和孝、吉田恍、渡部庄治（計二二人）
（下線は筆者より）

創刊号と最終号の同人メンバーを比較して見ればわかるが、始終一貫してメンバーとして在籍したのは飯塚朗と野中修のみである。前述した創刊者の江崎磐太郎は一九四三年十月に病死したため、最後まで見守ることが出来なかった。また、この三人の他、一時停刊を境に前期と後期を分ければ、前期の主幹メンバーとして木田春夫、朝倉康が挙げられる。後期の主幹メンバーには宮古田龍、長谷川広らがあった。メンバーの出入りがあ

ったことが明らかである。

さらに、名前を一瞥してほとんど文学界で名の知られていないばかりであることが分かる。強いて言うならば、「中国文学研究会」のメンバーでもある飯塚朗、岡崎俊夫、及び戦後本格的に作家として活躍するようになった中藪英助が目を引く程度である。飯塚朗は最初から「燕京文学」に関わったが、岡崎俊夫はずいぶん遅れて加入し、中藪英助は第十号（一九四二年一月一日発行）の同人録に初めて名前が見られる。同人のほとんどは、無名人物なため、彼らの生い立ちや経歴を全部究明するのは資料上ではきわめて困難である。例えば、野中修や朝倉康については「燕京文学」に発表した文章以外に、まったく知らないわけである。よって、以下、代表として飯塚朗と中藪英助だけについて手短かに紹介する。

飯塚朗（一九〇七年～一九八九年）は横浜生まれ。一九三六年東京帝国大学文学部支那哲学文学科を卒業。在学中、同人誌「東大派」を刊行し、中国文学研究会で竹内好、武田泰淳、松枝茂夫らを知る。一九三七年、高見順、武田麟太郎らの「日曆」同人となる。一九三八年北京に渡り、中華民国新民会調査部に勤務。一九四三年華北映画公司に勤務。憲兵隊に逮捕され拘留、帰国。四四年応召、中国戦線に出る。四五年終戦、蘇州で捕虜

生活。四六年復員。一九五一年より北海道大学文学部助教授、教授を務め、更に関西大学教授をし、七八年定年退職。戦時中、蘇曼殊、冰心、張恨水を研究する。

中園英助（一九二〇年—二〇〇二年）、本名中園英樹。福岡県出身。旧満洲を経て、一九三八年に北京へ遊学し、東亜新報記者を務めるかたわら、執筆活動を開始。一九四六年に引き揚げ帰国し、一九五〇年に「近代文学」に「烙印」を発表して以来、作家として船出する。小説の他、中国関係のエッセイも多く書き残す。一九九三年に「北京飯店旧館にて」により読売文学賞受賞。

遺憾なことに、飯塚朗にしても中園英助にしても戦時中長く北京に居たが、戦後「燕京文学」についてあまり語らなかったようである。調べた限りでは「燕京文学」関係の言説は見当たらなかった。忌憚なく言えるのは、「燕京文学」は彼らが青春時代に汗を流したところに違いない。

四、燕京文学社の創作スタンス

では、燕京文学社はどのような方針に基づいて文学活動をしたのか。前述したように、同人作品は出来るだけ中国に題材を

採ったものと要求された。すなわち、現地の生活に根差した文学を求めるのである。主幹メンバーの野中修は「大陸文学精神——序論として」で「日本文学の貧しさは、多くは出来合の、まいた種子にはすぐ明日にもその結實を要求する性急で単純な島國育ち独特の民族性に因るものであろう」と性急な日本文学を批判した。さらに彼は次のように述べている。

かゝる大陸に文學の建設を為さんとする事自體もとより容易な業ではない。單純なオプティミスト共は既に戰勝の氣分に甘くも同化して今日にも明日にも文化の花繚亂と咲きほこるかに觀じてゐるではあるまいか。（中略）かゝる荒地に文化が實を結ぶまでには五十年百年の誠に不拔なる堅忍さと絶え間なき逞しき精神が要求されはしないだらうか。満洲を含む今日の大陸には眞實の意味に於て文化は存在してゐないのである。あるものはたゞ植民地的な移民文化が跛を曳いてゐるだけである。左様な跛行的文化を我々は大陸文化として呼び育てあげ培つて行くつもりはない。（中略）現地で文學するといへばすぐにも砲声や銃声にあふられて安値なスローガンや俄か造りのモットー大切に地声を張りあげねばならぬとでもいふのであらうか。

要するに、時間をかけて現地で戦争に迎合しない純粋な文学を模索していこうというのは、野中修の見地である。そして満洲文学を模倣しないという点も興味深い主張である。燕京文学社の主幹メンバーとしての彼の主張は、ある程度燕京文学社の立場をも代弁したと言えるであろう。

燕京文学社が求めようとする純粋な文学というのは、また日本本土の文学を基準とする文学ではなかった。彼らは「華北文化の考察と我々の立場」でこのように記している。

日本内地の文化、そのの頂點とも考へられる東京の文化に對する思慕は、我々の精神の郷愁として深く潜在してゐる。しかし我々が何時までもそれをもつて基準とするならば、到底旅行者から脱却することは出来ないであらう。我々自身の成長は、いまこの華北における現實の時間と空間にあつて正しく育まれなくてはならない。¹⁵

日本内地の文学を基準とするどころか、むしろ打ち破るべきだとさえ考えたようである。それは、下記の第十三号の「編輯後記」からも読み取れる。

我々はいま「華北」にあるが、我々とわが文學傳統とは、たがひに鏡となつて、新しい姿を照らしあつてゐる。我々がときに表現に困惑するのも、ただ未熟なるためだけではなく、この鏡に映ずる多重像のためでもある。この多重像への積極的處理は、書くことによつて、現になされつつあるのであるが、此處をくぐりぬけてこそ、華北に住む日本人の文學、創造の場を見出し得るのである。

我等の文學も、表現の技法にその意を停めてゐるのではない。裡において、敵に打ち剋ち、既製の型に打ち勝つ以外にはないのである。¹⁶

傳統文學と互いに照らし合いながら、その型を打ち破つてこそ、「華北に住む日本人の文學、創造の場を見出し得る」という。日本傳統文學の枠に拘らない方針であつた。付け加えれば、ここでいう「既製の型」は満洲文學も含んだであらう。

一九四一年七月、多田裕計17の小説「長江デルタ」が第一三回芥川賞を受賞した。多田裕計は同人ではないが、現地中国に取材した小説であつたため、燕京文学社に大いに自信と勇氣をもたらした。この受賞に対し、引田春海は「我々過去を脊負ひ未來に立つものにとつては、長江デルタをその儘に終らすことは

できないであらう。現地の生活に深く根ざし、生命としての芸術を求めるところこそ我々の責任に於てなされる可きである」とと感激深げに述べた。

このように、燕京文学社は独自の創作方針と立場を持った。しかも、初期から「小さなサークルの雑誌でなく、北支文化人全体の雑誌にしたい」と意気揚々して目標を掲げた。その目標が達成できるかどうかは、何より同人に係るが、同人らの意欲は全体的にさほど高くなかった。それは、井口創が第十一号（一九四二年七月一日発行）の「編輯後記」で漏らした不満から窺える。

前號の後記で引田兄がふれてゐる如く、同人全體の意欲は沈滞を抜け切れないやうだ。この沈滞が、もし沈滞であるならば幸であるが。復刊當初の事情からして、従來の内地における同人雑誌の如き同志的結合を欠いてゐることが、大きな原因であらうとは思ふが、それ以上に反省すべきことは、各自が眞に主體的創造の立場に立つてゐないことだが指摘されよう。いはゆる文化意識といふ半社交的意識を抜け切れないではどうにもならぬ。單に作品が乏しいといふだけでなく、定期の集會にもろくに出席せず、お互ひに

會つても、（ママ）加減な世間話でお茶を濁し、議論し合ふこともない現状は、速かに打開されるべきであらう。

何と言つても燕京文学社の大多数が文化人と言へるほどの覚悟を持つておらず、文学に対する執念も少なかったと考えられる。それが故、定期の集會に欠席し、顔を合わせる時でも世間話をし、文学について議論することはない状況となつたのである。極端的に言うると、人によつては燕京文学社を郷愁を晴らす場所と視したかもしれない。

また、燕京文学社においては、文学について語り合う「燕京文学懇話会」が開催されたが、二回程にとどまつたようである。二回目の時「天候悪く参加者も少なかった」。懇話会への参加も熱心ではなかつたと窺える。

同人の創作意欲の低迷にあひまつて、「武器」とされていた紙も常に不足し、華北の風土に慣れず肉体的苦痛が伴う中、最後「我ら華北の戦ふ文學が、なかなか軌道に乗らないで、我々自身が我々自身に對して嘆かなければならない。」ことになった。實際のところ、「燕京文学」に掲載された作品では、江崎磐太郎の「風土に病む家」だけが、最終的に落選したが、第九回芥川賞（一九三九年）の予選候補に選ばれたため、注目を浴びた。その

他はほぼ評価されずに知られずじまいになった。しかし、立石伯氏は「燕京文学」に掲載された諸作品を読んでみれば、相当こなれた、文学としての質の高いものが多い。中園英助、飯塚朗、野中修、江崎磐太郎、長谷川弘、引田春海、清水信などの諸作品は文学として悪くはない小説、評論群である」と評価した。

五、現地中国文学との関係

前述したように、燕京文学社は「燕京文学」を「北支文化人全体の雑誌にしたい」と張り切った。「北支文化人全体」には中国人も含まれるはずであるが、同人を頑なに日本人に拘りつつあったため、「北支文化人全体の雑誌」になるのが到底無理であった。しかしながら、中国文学と全く無関係だったというわけでもない。むしろ、切っても切れない関係にあった。引田春海はこう述べた。

中国の作家たちを知らうとする望みはいつも変らずに持ち続けられてゐるし、最近とくに熾烈となつて、中国の作家を燕京文学の同人にしてはどうかと言ふ意見まで出て來た。

言ふまでもなく、これは文學創造の本來の立場から不可能なことが明らかであるが、その話とは別に中國の文學を知らうとする熱情は、十分満たされなくてはならないのである。

中国にいた以上、中国文学に対してまったく無関心でいられないのは、至極当然であるが、何よりも燕京文学社は中国に根差して文学を作らうという方針であるから。もつとも、新たな華北文化を構築するには、中国人の力を抜きにしては無理だという認識も理由の一つであらう。

我々は共同の生活に於てあらゆる方面に亘り相互に責任をもつものであり、その責任を果たすべく努力せねばならぬのである。我々は華北で發行されてゐる雑誌は一つも良心的なものはないといふ。(中略)我々は中國人と共に華北の文化を創り得る基礎を見出すのである。

このように、小さく言えば燕京文学らしい文学を創るには中国文学が必要であり、大きく言えば華北文化を築くには中国文学を引き離してはいけない。いわんや、同人の中に飯塚朗を始め、中国文学を勉強・研究するような人がいた。したがつ

て、彼らは中国人女性作家氷心や、劇作家曹禺、小説家張恨水等の作品を多く紹介・翻訳して掲載した。

それに反し、中国人の『燕京文学』に対する関心は濃厚とは言い難かった。同人らの作品も中国人に翻訳・掲載されたが、管見では『華北作家月報』²⁸⁾一九四三年第八号には『華北日本作家短篇創作介紹特輯』として、吉田愔の『内海』、小濱千代子の『桂花』、清水信の『帰郷』が訳載されただけである。政治的関係から考えてもそれが無理はなかったと言わなければならない。

終わりに

一九四三年十月五日に創刊者の江崎磐太郎が病死し、第十七号を以て追悼号とした。続いて第十八号(一九四四年八月発行)も同人渡邊庄治の追悼特輯を組んだ。次々と亡くなった同人の運命を共にするかのようになり、予定された第十九号「創刊五周年記念の小説特輯」が発行できずに、『燕京文学』は終わりを告げられた。

燕京文学社は、単なる内地文学の延長として位置付けず、独自の華北文学を現地の生活に根差しながら気長に創り出そうとしたところで、文学の花を咲かせるには必要な指導、創作素質、

出版といった土壌が欠けたうえに、多くの同人のモチベーションが低かったため、彷徨いを見せつつ文壇に大きな足跡を残さずじまいになった。

最後に、本稿は日本占領下の北京における日本文学結社「燕京文学社」及びその同人誌『燕京文学』の一部始終を明らかにすることを目的とし、主に『燕京文学』に依拠しつつこれを浮き彫りにした。次稿では作品について分析したいと思う。

(注)

(1) 小林元裕「華北分離工作期北京の日本居留民」、『環日本海研究年報』第十八号、二〇一一年、四五頁。

(2) 立石伯「『燕京文学』と『中国文学』——淪陷区・北京からの光芒」、同「北京の光芒・中蘭英助の世界」(オリジン出版センター、一九九八年)に所収。

(3) 同上、六四頁。

(4) 引田春海「編輯後記」、『燕京文学』第一号、一九三九年四月一日、八二頁。

(5) 一九四四年四月三十日発行の第十六号より、発行所は「燕京文学社 北京市内六区南池子民聲胡同一號北京文化協會内」となる。

- (6) 『東亜新報』について別稿で詳述するが、ここで簡単に紹介する。日本「北支軍」の機関誌として一九三九年七月一日に発刊され、徳光衣城が社長を務める。軍機関紙の色を出さないため株式組織にし、資本金は三十万円であったという。新聞の目的は華北在留日本人にニュースを提供することであるが、戦争に勝ち抜くための居留民の戦意高揚も使命とされた。終戦後、中国に接收された。石川輝編『東亜新報おほえがき—戦中・華北の新聞記者の記録』（東亜会、一九八四年）を参照。
- (7) 「江崎磐太郎略歴」、「燕京文学」第一七号、一九四四年八月五日、六四頁。
- (8) 江崎磐太郎「創刊の辯」、「燕京文学」第一号、一九三九年四月一日、二頁。
- (9) 江崎磐太郎「萌へ出づる」、「燕京文学」創刊号、一九三九年四月一日、七六頁。
- (10) 引田春海「編輯後記」、第二号、一九三九年五月一日、一〇四頁。
- (11) 『燕京文学』第六号、一九四〇年一月二五日、「お断り」、一三三頁。
- (12) 『燕京文学』第四号、一九三九年八月一日、八一頁。
- (13) 『燕京文学』第十四号、一九四三年六月二十日、「編輯後記」、五九頁。
- (14) 野中修「大陸文学精神—序論として」、「燕京文学」第一号、一九三九年四月一日、
- (15) 燕京文学同人「華北文化の考察と我々の立場」、「燕京文学」第一号、一九四二年七月一日、五頁。
- (16) 引田春海「編輯後記」、「燕京文学」第一三三号、一九四三年三月二五日、六三頁。
- (17) 多田裕計（一九二二—一九八〇）、福井県福井市出身、小説家、俳人。横光利一に師事する。一九四〇年上海中華映画に入社して上海に渡り、翌年「長江デルタ」で芥川賞を受賞する。戦後石田波郷の俳誌「鶴」に参加、「れもん」を創刊・主宰する。
- (18) 引田春海「編輯雑記」、「燕京文学」第九号、一九四一年九月一日、五〇頁。
- (19) 朝岡康「編輯後記」、「燕京文学」第四号、一九三九年八月二五日、八四頁。
- (20) 同上。
- (21) 長谷川弘「編輯後記」、「燕京文学」第十七号、一九四四年八月五日、一〇四頁。

(22) 『燕京文学』第二号(一九三九年五月一日)に初出、同誌第十七号(一九八八年八月五日)「江崎磐太郎追悼号」に再録。

(23) 前掲立石伯「燕京文学」と「中国文学」——淪陷区・北京からの光芒、六四頁。

(24) 「編輯後記」、『燕京文学』第十四号、一九四三年六月二十日、五九頁。

(25) 引田春海「編輯雜記」、『燕京文学』第九号、一九四一年九月一日、五十頁。

(26) 周作人を中心とする華北作家協会の機関誌として一九四二年九月に創刊され、一九四三年八月に終刊。張泉「淪陷時期北京文学八年」(中国和平出版社、一九九四年)を参照。

(27) 生卒不詳。『華北作家月報』の紹介によると、北京のある会社に勤める夫に随行し北京に渡る。専業主婦。

(28) 生卒不詳。『華北作家月報』の紹介によると、北京に来る前に上海に滞在し、現地の日本文学者主宰の『長江文学』に小説やエッセイを発表したことがある。燕京文学社の女性同人としては小濱千代子と吉田悦だけであるという。

(29) 生卒不詳。『華北作家月報』の紹介によると、当時二十四歳。明治大学出身、一九四三年八月に、日本文学報国会に選

抜・派遣されて北京大学で留学し、中国文学を専攻するとい

う。
(30) 訳者はそれぞれ王真夫、梅娘、王介人である。

(すう そうそう／中国中山大学外国語学院)